

文部科学大臣 萩生田光一 殿
文化庁長官 宮田亮平 殿

文化庁によるあいちトリエンナーレ補助金不交付に強く抗議します。

今回の決定は、未来の日本の文化を大きく変えてしまうかもしれない。今後、文化庁の助成を受ける文化事業を萎縮させるでしょう。もちろん、それが目的であることはよくわかっています。

この現在が歴史化されたとき、助成金／補助金を人質にした、「手続きの不備」という口実による、事後的な（新しい）検閲行為として、人びとに記憶されると思います。これは未来の芸術、その作り手、その観客への呪いのようなものです。

しかし、です。むしろ、かえってこれはいい機会なのかもしれない。助成金に頼ることで、弱くなった文化を、現代美術を、美術館を、芸術祭を、そしてアーティストを、より強くするそういう機会なのかもしれない。

政府のサポートがなくても、文化は死なない。つまらない呪いの力をはねのけ、文化は自身の力で生きていく。

文化は、芸術は、本来そういうものです。私たちアーティストは、どんな状況でも、どんな場所でも、誰とでも、あるいはひとりであっても、制作をし、見せることができる。芸術は、制作実践は奪われることはない。

残念なことに、お二人の名前は永遠に記憶されることになるでしょう、呪いをかけた張本人として、歴史の中に、文化史の中に、そして美術史の中に。

文化庁は、いままでさまざまな、実験的な表現も受け入れてきました。ぼくもそのサポートを受けたことがあります。昨年は文化交流使として、日系移民史を調べるためアメリカに滞在しました。アメリカは自国の負の歴史、日系人強制収容の歴史を深く受け止めています。日本も、負の歴史を受け止め、加害の歴史を記憶することも必要ではないでしょうか。深く反省することで切り開かれる未来もあると思います。

補助金交付中止という、文化・芸術への行政介入は、未来を暗く閉ざす可能性があります。それはとても残念でならない。まず不交付の撤回が必要です。

田中功起
2019年9月28日